

大乘經典の成立

部派仏教という言い方は、以前は小乗仏教といていたのを改めたものでこの頃使われるようになったのです。小乗というのは大乘仏教の側からの貶称（蔑んだ呼称）であるとのことで、具合が悪いということになったのです。

今日では、よく大乘仏教の興起という言い方をしますが、これは仏教の展開の歴史的な研究の結果、今まではなかったものが起こったという言い方です。これは少しおかしいと思いますが、しかし、大乘仏教の經典の成立は現在の学説によれば、どんなに古い經典でも釈尊のご入滅後、三～四百年を経ているとのことです。たとえば、法華經ですがその中の信解品の長者窮子の譬喩を取り上げて貨幣經濟が発達した世紀四十年以後を遡ることはできないといわれています。すなわち、中村元博士は「『法華經』信解品に長者窮子の譬喩があるが、金融を行って利息を取ってゐた（「出入息利乃遍他國、商估賈客亦甚衆多」）或る偉大な長者の臨終のさまを叙して

ひとり豪富であるにとどまらず國王らを畏怖驅使せしめるような資本家の像は、非常に貨幣經濟の進展した時代でなければ現れて来ない。ところでインドの貨幣經濟は、既に考察したやうに、ウェーマ・カドフイセース（約世紀三七年以降）の時代に於いて急激に発展した。故に法華經成立年代の上限は約世紀四〇年であると考へられる。」

以上のように述べておられます。

（宮本正尊編「大乘仏教の成立史的研究」pp487～8 三省堂）

こういうように具体的な歴史上の資料をもって論じられると、なるほどと思ってしまいます。そして、法華經自体はそんなに釈尊の時代から離れた頃にできあがったのか、では釈尊の教えではないのではないかなどと思い信心を失うことだってあるかも知れません。

でも、法華經など大乘經典の成立と大乘仏教の思想の成立は分けて考えなくてはな

らないと立正大学の勝呂先生は述べておられます。それに大乘仏教の思想そのものは、釈尊の真意であることは現代の多くの学者が認めていることです。

ただ、大乘仏教の経典が文字化され、文献としての経典が成立したのは世紀前後からであることは、もはや疑うことのできない定説となっています。

江戸時代以前は、一切の経典は釈尊の金口直説（実際に釈尊が自ら説かれた言葉そのままであること）と信じられ、それぞれの宗旨における宗学（教学）はこれを前提としていました。しかし、近代以降の仏教学ではそうとは言い切れないばかりか経典は釈尊の説かれた教えとして後代に作成されていったもので経典によって新古の差があると主張されるように至りました。

私たちの信心の立場から言うならば、そんなことを認めるわけにはいかないという考えもあります。なぜなら、すべての経文は釈尊がお説きになったという前提で天台大師は五時八教という教相判釈をされたからというわけです。教相判釈というのはインドから中国に沢山の経典が渡来して翻訳がされましたが、それらの経典は決して組織的に翻訳をされてきたわけでも体系的に整理をされていたわけでもありません。なかにはAという経典とBという経典では説く内容が正反対ということだってあるくらいですから、中国の人々が困惑したのは当たり前です。そこでいったいどの経典に釈尊の真意が述べてあるのかという大問題が起ってきたのです。これに対する答えを出す作業が教相判釈（教判）です。経典の教えの内容や形式から分類をして多くの経典の優劣の判定をします。天台大師の五時八教の説もその教判のひとつで最も有力なものでした。五時八教というのは、釈尊が三十歳で悟りをお開きになってから八十歳で御入滅をされるまで、五十年の間に大きく分けて五時（五つの期間）にわけて教えを説かれたとするものです。この説によれば、釈尊の一代五十年の御法門の眼目は、最後の法華涅槃時において説かれた法華経であるということです。これは大変に説得力のある説で、他の諸師の唱えていた教判も吸収されていますので殆ど仏教の常識となりました。

日本天台宗の根本道場である比叡山で学ばれた吾祖師、日蓮聖人も当時の定説としてこれを受け入れられて多くのお書き物をあらわされています。

ですからすべての経典ではなくとも、中国撰述の経典（偽教）を除くほとんどの経典は釈尊の直説であるという信仰というか信頼が崩れると今までの伝統的な宗学は成り立たなくなりまから大問題です。これは他宗の宗学でも同じですから、仏教界を揺るがす問題でした。事実、明治時代に経典は釈尊の金口の説法ではなく、大乘は非仏説であることを学問的に論証しようとした浄土真宗の村上专精博士（1851～1929）は一時僧籍を剥奪されました。

さて、大乘非仏説論という仏教の屋台骨を揺るがす論は、実は既に江戸時代からありました。大阪の代々醤油の醸造を生業とする商家に生まれた富永仲基（1715～46）は文才があり数種の本の出版をしました。1745年には出定後語を著わして仏教経典は「異部加上」により成立をしていることを明らかにしました。「異部加上」というのはある思想が成立をするとその後でこれに対して異なった思想が現れ、その上に付加されこれを繰り返すというものです。そのためあらゆる思想や学説は歴史的に発展して行くもので固定的ではないということです。仏教もその通りで、数多くの経典こそ異部加上の産物で釈尊一代の教説ではなく順次に作成され加上されたものであるということです。そして、釈尊は外道の教えに付加、補正をして仏教を説き、さらにその滅後に経、律、論の三蔵の編集（結集）がおこなわれ、ここに小乗仏教が成立した。その後、文殊の徒が小乗仏教に加上をして般若の教えを作り、更に法華氏、華嚴氏、涅槃氏、頓部氏（楞伽経）、秘密氏（密教経典）がそれぞれの説を作り加上したので仏教学者が諸経典がすべて釈尊の金口直説とするのは愚かなこととしています。さらに釈尊の直説は阿含経の中でも極一部に過ぎず、経典として記録されたものは釈迦の滅後相当な時期を経た後であり、それまでは口誦で伝えられたものであるといい、その口誦には韻文の形式のガーター（偈頌、伽陀）が向いており経典の本体はガーターにあると主張をしました。この論調は現代仏教学にも殆ど受け継がれていますから、

その影響は非常に大きいものです。

「釈尊が韻文なり詩の形式で御法門を説かれたは到底考えられないから、一概にガーターの方が経典の中では散文の部分（長行）より本質的であり古い部分であるとは言いきれない、中には韻文にないことを長行で補ったり、相互補完的な面もあるから同時の成立であったり、あるいは逆に長行の方が古いこともある」

と勝呂博士が主張をされていますが今もってほとんどの学者が富永仲基流の意見のようです。

「出定後語」の刊行の後、当時の廃仏論者に歓迎され、儒学者の服部天游（1724～69）は「赤俵々」一卷を、国学者の平田篤胤（1776～1801）は「出定笑語」四巻を著わしました。同書で篤胤は日本、天皇、神道を最高のものとして仏教に対して卑俗な用語や表現を用いて排撃をしています。

明治時代からヨーロッパの実証的な学問研究の方法論がわが国の仏教界に移植をされて以来、一層、大乘非仏説論が盛んになりました。そこで「原始仏教に帰れ」と主張され原始経典とされる南伝のパーリ語聖典や阿含経の研究があたかも仏教研究の王道とされるに至ったのです。

しかし、田村芳郎博士が

「パーリ語聖典が現在のような形に整ってくるのは西暦五世紀にブッダゴーシャ（Buddhaghoṣa 仏音）がセイロンに渡り、編集をおこなってからであり、その中から古いものをよりわけたとしても、その古いものの中に、後世の説と思われるものが入りこんでいることは、前に述べたとおりである・・・・・・・・・・

中国では、西暦二世紀には訳経がおこなわれはじめており、したがってそのもとをなした原典、ないし写本は相当に古いものとなるわけであるが、現存しないので考察の対象にはならない。

以上のような次第で、原始経典に帰ってみたところが、仏説を探しだすことは至難であり、不可能なことがわかり、大乘非仏説というなら、原始仏教もまた非仏説とな

りかねず、ひいては仏教全体がシャカの教えではないという一種の絶望感におちいるにいたった。しかし、近年は、仏説の意味を解釈しなおすことによって、あらためて仏教に対する信念を再確認しようとする傾向が見えだした。仏説をシャカの直説と解する必要はなく、シャカの真意と考えればよいということである。」（中公新書「法華経」pp18～20）

と、述べられ、さらに現代の研究者の取るべき態度として、客観的な研究成果を援用しつつ、しかも自ら信念によって経典を選び取り主体的に研究を深めるべきであると結んでいます。

現代において学術的研究をしようとする、どうしても結論としては全部の経文がすべて釈尊の説かれた言葉そのままとは到底いいきれないのです。

そこで、学者であると同時に僧侶であるような人々は、学者としてはあくまでも実証的な研究方法を取り経文を釈尊以外の人々が作り上げたものであるという立場に立つ一方、僧侶としては信仰的な立場で旧来の説を擁護するという二重人格的なやり方で急場をしのいでいます。これは何か非常に不自然さを感じます。

では一体、どうしたら良いのでしょうか。そこで考えられることですが、現代の学問の成果に対してもやはり正面から見据えて正当な評価を与えなくてはならないのではないかということです。もし、お御祖師様が現代の仏教学的方法を駆使し得る立場におられたらどうでしょうか。これを採用して、その上で天台大師の教判をまた、再び検討されるのではないのでしょうか。

ですから、ひとつの完成をされた学問としての宗学に閉じ込めればこんなに忠実で楽な方法はないかも知れませんが、肝心の真実から目を背けることになりはしないか、また、識者の批判に堪えることのできない観念の遊戯にふけっているとのそしりを免れるものではないのではないのでしょうか。

仏教学にしても歩んで来た道は、決して間違いがひとつもなかったわけでもなく、試行錯誤をしながら来ているようです。ですから、批判すべきを批判し、取り入れる

べきをとりいれて独善的な学問に宗学というものがならないようにしていかななくては、自らその価値を低下させてしまうでしょう。

しかし、実は大体、天台大師その方にしても果して、すべての経典を直説と考えられていて、なんとか膨大な経典の辻褄を合わせようとされ五時八教の教判を立てられたのかどうかというのは大いに検討の余地があります。実はそんな非難があるうことは承知の上で（当時としては仏弟子として、明らかな偽経は別としてすでに仏説として翻訳されてきたものを、これは仏説ではない、これは仏説であると分別する方法も根拠もないので恣意的に分別をすること自体が許されない行為であったでしょう。）純粹に各経典の教理内容から分類整理をしてひとつの雛形として五時八教の教判を立てられたのであろうという人もあるようです。つまり天台大師の教判は、それまでの仏教の遺産である経典に現われる仏教思想全体の統一を試みられたというところにその本領があるのですから、直説云々の論議自体は大師の教判の価値を決して低価値にするものではないのです。

結局どうしたら良いのか、やはり迷ってしまいそうですが、これは学問の宿命なのです。頭で考えるだけでは限界があり、選び取るにも私達は膨大な経典を目の前にしては選べないのが現状ではないでしょうか。

そこで、もう一度、現代の眼も失わずに昔の偉大な仏教研究者である天台大師やお祖師様を案内者としてその学説を学び、そして、もっと大事なことは信心の実践を通じて学ぶことです。学問では一向に結論は出ないのであるから。経文の真実であるかどうかの判定をお祖師様が現証によって出されようとしたのはまさしくそういう意味です。現証によってこそ法華経の真実仏説であることが明らかになるのであり、一般の学者では到達のしようがない結論なのです。